

## 「古墳時代の葬送儀礼を物語る遺物」

### いしまくら りっか 石枕と立花



▲大戸宮作1号墳 石枕・立花出土状態

古墳は、3世紀後半から7世紀にかけて全国各地で盛んに造られました。

香取市においても、前方後円墳をはじめ円墳や方墳など多数の古墳が築造され、現在のところ約500基が確認されています。特に、三ノ分目の大塚山古墳は、

県内屈指の規模を誇る、5世紀中頃の代表的な大型前方後円墳です。古墳の内部には、武器・武具・装身具など、さまざまな副葬品が取められています。今回は、当地域の5世紀から6世紀前半に特徴的な副葬品である、石枕と立花を紹介します。

#### 石枕と立花とは

石枕は、文字どおり石で

作った枕のことですが、私たちが日常使うような枕ではありません。死者の頭を載せる葬儀用の枕です。通常、平面形を円形や馬蹄形に成形し、中央部は頭を載せるように窪めています。

現在のところ、千葉県内で約70個の石枕が見つかっていますが、これは全国の6割近くを占めています。また、その大半は旧下総町、神崎町、旧佐原市の利根川流域に集中し、千葉市や成田市、対岸の茨城県鹿嶋市、稲敷市などにも一部分布しています。

立花は、2個の勾玉を背中合わせにして軸に縛った形状を模した石製品で、石枕の外周に穿たれた小孔(立

花受孔)に立て並べたものです。

上の写真は、昭和62年に発掘調査した大戸宮作1号墳から、石枕や立花が出土した状況を撮影したものです。

石枕は、縦25cm・横29cmで、馬蹄形に成形され、外周には7個の立花受孔があります。立花は計8本出土していますが、石枕には1本も立てられておらず、すべて石枕の周囲にばら撒かれた状態で発見されています。これは大戸宮作1号墳に限らず、これまで調査された他の古墳においても同様です。古墳に埋葬する時点では、石枕に立花を立てることはなかったようです。

#### 葬送儀礼に使用

このことから、石枕に立

花を立てて使用したのは、埋葬前に行われた葬送儀礼の段階であったと考えられます。その葬送儀礼が具体的にどのような内容であったのかは明らかではありませんが、「殯」と呼ばれる儀礼であったとする説が有力です。殯とは、死者を埋葬するまでの一定期間、殯宮に安置し、そこで「魂鎮め」などさまざまな宗教的儀式を行ったものです。

石枕と立花は、殯の期間中にその役目を果たし、その後、死者とともに古墳に埋納されたものと考えられます。これらの地域は、石

枕と立花を媒介とした共通の葬送観を持つ地域であったと言えます。

一方、利根川下流域最大の古墳である大塚山古墳を築造し、また、後の下海上国造の勢力基盤と考えられる旧小見川町域からは、石枕や立花がひとつも発見されていません。この事実が何を意味するのか、大変興味深いことです。



▲石枕と立花